

## 思いやりで生まれる人けん

小学校二年 大橋 詠一

ぼくの家には、ゆう先じゅんいがある。まずは弟のりゆうごだ。だって、まだ小さな赤ちゃんじゃべられないから、みんなは自分のことをあとまわしにして、めんどろをみてあげないといけな

い。ないでいる時は、だつこしてあげる。そうすればあん心してなき止む。

ゆびをしゃぶっている時は、ごはんをあげる。お口の方へもつていったら、口をあけておいしそ

うに食べる。おむつをさわっている時は、よごれていきもちわるいんだ。かえてあげると、スツキリとした顔になる。

目をこすっている時は、ねむたいんだ。ねかしてあげると、いいゆめを見てそうなしあわせな顔でねる。

あぶないことをしている時は、けがをしないように止める。

手をたたいてくる時は、あそんでほしいんだ。あそんであげるとうれしそうにする。

0才の赤ちゃんにだつて、毎日たのしく・元気に・かいてきにすぞすけんりがある。

それは、生まれながらにして、そうするけんりをもっているからだ。

それからぼくは自分のことを考えた。『もう死なせない』という本を見て自分とくらべてみた。

ぼくは一日三食おなかいっぱい食べられる。けれど戦争がつづいてる国では、ごはんをまん足に食べられない子どもがたくさんいる。

ぼくにはいえがある。いえがあれば、そとがあつくてもさむくてもかいてきにすぞせる。いえをなくした人たちは、じゅうだんのあとだらけのビルやはんぶんこわりたいえにすんで、ふべんな生活をしている。

ぼくには親がいる。うまれてからいままでももられ、ひつようなものはあたえられてきた。でも、親もいえもなく、ろ上で生活している「ストリートチルドレン」は、なにもあたえられず自分たちの力で生きている。

ぼくが一番印しようにのこつたしゃしんはジュリエットだ。ジュリエットはエイズというびょうきにかかつていて、のこり三か月しか生きられない。親にも国にもちりようするためのお金がないからだ。げんいんは戦争だ。

大人は、自分たちのつごうで戦争をはじめた。そのせいでその国の子どもたちはうばわれた。ぼくやりゆうごがもっている、いえも親もけんこうもみらいもなにもかも。

はやく世界から戦争がなくなつてほしい。そうすれば子どもはけんりをとりもどせる。戦争がなくなるには、大人がもつと自分のつごうばかりじゃなくあいてのことも考える。

人けんは思いやりで生まれるから。

## 世界と地きゆうのためにできること

小学校二年 棚田 紗帆

みなさんはツバルという国を知っていますか？ わたしはこの国のことをテレビで知りました。この国は南の小さな島国です。そしてこの国はあとなん年かするとなくなつてしまうのです。なぜかというとこの国の土地はとてもひくくて海にしないでしまうからです。今、地きゆうはだんだんあ

たたかくなつて、南きよくや北きよくの氷がとけて海の水もふえていそうです。

わたしと同じくらいの子どもたちが学校でべん強したり水びたしになったところであそんでいるのを見ました。その学校や家がなくなるなんてしんじられませんでした。お年よりたちもいままでくらししてきたところがなくなり、はたらく人はしごともなくなくなるのです。

わたしはもつと世界のことや地きゆうにおこつていることをしらべていたいと思いました。図書かんで『世界と地球の困つた現実』という本をかいて読みました。世界中の人が食べものが足りずにこまつていることや、わたしたちの毎日の生かつで多くのエネルギーをつかうこと、そしてそのせいで地きゆうがあたたくなりツバルのような国がでてきたりすることを知りました。ということはわたしたちがテレビを見るのを少しがまんしたり、紙のむだづかいや車をつかうのをなるべくやめると、いろいろなところでたすかる人が出てくるというのに気がつきました。

わたしの家ではいつもペットボトルや牛にゆうパックや、肉や魚を買った時に出るトレイをあらつて、ふつうのゴミとはべつにあつめています。そして近くのスーパーのかいしゆうボックスというところに入れに行きます。わたしははじめ、牛

にゆうパックを広げるのをお母さんにいつもたのまれるので、めんどうだなあと思っていました。でもうちの牛にゆうパックだけでもすぐにたくさんたまってしまいます。このゴミがリサイクルされることで多くの人たちがたすかったり、地きゅうがまもられるのなら、これからはめんどうがらずに自分から、お手つだいをしようと思います。この間、新聞を読んでいたお母さんが、わたしたちの町、堺のゴミもみんながもつとしゆるい分けをして出すようになると言っていました。一人でも多くの人が、リサイクルやエコにかん心をもつてくれたらいいなと、うれしくなりました。世界中には、わたしがふつうに食べているごはんを食べられずにびよう気になつたり死んでしまつたりする子どもたちがたくさんいます。べん強したくても学校にいけない人たちもいっぱいいて、たすかるいのちもたすからなかつたりしています。わたし一人の力は、小さいかもしれないけれど、多くの人が地きゅうや世界のことを知って、みんな協力すればきつと大きな力になると思います。だからわたしたち子どもから大人の人たちに「エコをおねがいします。」としつかりよびかけていきたいと思えます。

## 「ひとりぼっちのライオン」を読んで

小学校二年 西尾 空

ぼくはだいを見ただけで、とてもさみしくなつて、なみだが出そうになりました。

ライオンは、さみしかったのでともだちがほしいと、ともだちをさがしに出かけました。

ライオンは、ともだちになつてもらおうとやまあらしのまねをしたり、ひつじとおなじくくる木の毛にしたり、しかに出あつたときはたてがみに木のえだをさしてつのかわりにし、体に白いもようをかいたりしたけど、みんな、ひとめ見ただけでにげていきましました。

ライオンは、とうとうおこつてしまい、おそろしい声でほえた。ぼくは、ライオンの声に森じゅうのなかまがふるえたとした。

そのとき、雨がふりました。ライオンのもようも雨できえて、えだもとれていました。

『そのばんもやっぱりひとりぼっちでした。』という文が、ぼくの気もちもさみしくしました。ライオンは、なきながらねたと思つた。

つぎのあさ、ライオンがおきると、やまあらしと、ひつじと、しかがしんぱいして見にきていました。

やまあらしも、ひつじも、しかも、とつてもやさしいなあと思いました。ライオンがきのうのわけを話すと、みんな、ともだちになれました。よかったあ。

ライオンは、こわそうだからとか、思ったらいけないんだよね。ライオンも、自分の気分で大声でおこつたりしたら、ともだちははなれてしまうよ。気をつけようね。

ぼくも、ともだちになつてもらうとき、その子のきげんをとることがあつたけど、それは、本当のともだちじゃないことがわかつた。ともだちになりたいときは、

「いっしょにあそぼう。」

とか、ちゃんとやって、いけないことはちゃんとだめだよ。」

と言つて、よいことは、はくしゆしたりして、心からたのしめるともだちにならないといけないと心につよく思つたよ。

さいごの文の、『ライオンは、もう、ひとりぼっちではありません。元気にみんなとさんぽにかけていきました』というところが大すきです。だつて、すつごくなかがいいなあつかんじがするからです。それに、ライオンのうれしそうな気もちがつたわつてくるからです。ぼくもいっしょにさんぽしている気分になりました。

みんながなかよくして、さみしい人なんてつくりたくないよう、みんなで声かけ合つて、これから、しつかり生きていこうと思います。

ライオンくんも、もう、だいじょうぶだね。

## 友だちに親切にされたこと

小学校四年 姥谷 大輔

ぼくは、三年のときに、一人の友だちから、二月の初めくらいから十日ほど毎日いやがらせをされていました。頭をたたかれたり、つくえにあつた教科書を落とされたりしました。でもいつもそのたびに、おか本君が、「やめろや。」とたすけてくれました。やられてくやしかつたけれどおか本君がいつも味方になつてくれたので、ぼくは、まけずにいられました。じつは、ぼくがいやがら

せをされるまえに、おか本君が、その友だちに、いやがらせをされていました。そのときぼくは、「やめる。」と言いました。そのとき、ゆう気をだしていったのでよかったです。だからおか本君もぼくのことをたすけてくれたんだと思います。そのあと、先生と話していやがらせは、なくなつて、いやがらせをしてきた友だちとも仲なおりできて、帰りもいっしょに帰りました。

ぼくのとんじょう月に、クラスのみんなから手作りプレゼントをもらいました。その中に、「君にまけないで、なにかしてきたらわたしが言つてあげるね。」という手紙がはいつていました。ぼくは、すごくうれしかったです。おか本君だけじゃなく他の友だちも味方になつてくれてるんだと思うとすごくうれしかったです。ゆう気ができました。いやなときはあつたけど、友だちのやさしい気もちをかんじることができました。ぼくはぜつたいいやがらせをしません。人がいやな気もちになるからです。

## 「ピカドン」を読んで考えたこと

小学校四年 上 藪 奏咲

わたしが、この本をえらんだのには、理由がありません。わたしは、『炎の街から』というせんそう中の話のミュージカルにさんかしてました。そこでせんそうのことやこわさを知り、せんそうと平和についてもつと知りたいと思うようになつたからです。

空がピカツと光つた時、病気でねていたへいたいもみんな、何がおこつたかわからなかつたと思います。外にでたいがけいれいのすがたの友のかたをたたいて、ザラザラとくずれおちてしまつた時は、すごくびっくりしたと思うしこわかつたと思います。いつしゆん空が光つただけで、こんな風になるなんて、だれも思わなかつたと思います。たつたいしゆんのできごとで、たて物がくずれ、家も畑も人ももえていました。あちこちに、まつ黒な死体があり、水をもとめる人やさまよう人、体中やけどをおつた人、こならんしている人、家族や友達をさがしまわる人、なきさけぶ人で地ごくのようになつていたと思います。やけどやけがで、くるしむ人、うごけなくなつてしまつた人たちをたすけてあげたくてもたすけてあ

げられないなんて、つらすぎると思います。何もできず、見ごろしにするしかできなかった人たちは、きつとくやしかったと思います。そしてその時のことをずっとわすれることができないんじゃないかと思えます。

ピカドンにやられて、まごやいとこをなくし、よく年におじいさんもなくしてひとりのこされたおばあさん。そのおばあさんが、毎日かく、明るく美しい絵には、平和へのねがいがかめられてい

ると思えます。  
「ピカは人がおとさなおちてこん。」と言ったおばあさんの言う通り、せんそうは、国どうしのケンカじゃなくて、人ごろしだと思えます。せんそうからは、何も生まれたいと思いません。かなしみとにくしみしか生まれたいと思いません。もう二度とこんなつらいことはしてはいけな

## はじめてわかった人けん

小学校四年 平岡 菜々穂

わたしは、人けんという意味がよくわかりませんでした。

だから夏休みにお母さんと平和と人けんてんを見に行きました。

でも、まだよくわからなかったので堺市立平和と人けんし料館フェニックス・ミュージアムにも行きました。

そこでわかったことは、人は、みんな平等で幸せにくらして自分以外の人のことも大切にすることだとわかりました。

そして、もう一つわかったことは、たくさんのさべつがあるということです。はだの色がちがうこと、女の人だからということ、部落があること、いじめがあること、しょうがい者だからということ、住んでいるか

んきょうのことなどたくさんのさべつがあつて、わたしはとてもびっくりました。  
わたしが、これからできるのは、いろんな人やさしく友達を大事にして一しよに勉強していくことだと思えます。

人けんし料館でこんなしつ問コーナーがありました。自分のことが好き？答すき 家族が好き？答大好き 友達がいますか？答いる どんな時が楽しい？答友達と遊んでいる時 どんな時が悲しい？答遊んでいる仲間に入れなくて一人の時 あなたは、一人ぼっちですか？答いいえ あなたは、どんな人ですか？答泣き虫、以上です。このしつ問が終わって思ったことは、わたしは、一人になることが一番いやでつらいことなんだと思いました。だから人けんつて本当に大切なんだと思います、はつきりと人けんの意味がわかりました。わたしみたいに入けんの意味がわからない友達がいると思います。だからわたしは、友達に教えてあげようと思います。そして学校のみんな人けんの大切さがわかって、わたしたちが大人になつたらなにもさべつのないかんきょうもい地球になつていてほしいな。

## ほまれ

小学校五年 山内 ひなの

私は、小学五年生。この夏、もう日焼けして真っ黒。私は、小学三年の時にサッカーを始めた。ほとんど男の子ばかりのチームの中に入団して今もがんばっている。この間、私は大阪府女子選抜U11に選ばれた。むずかしいことはわからないけれど、とにかく大阪代表として試合に出られるんだ。うれしい。ちよつと自信が出た。夏休み、お母さんが本を買ってくれた。「ほまれ」という澤穂希さんの本だった。澤選手は、女子サッカーの日本代表のエース。澤選手はサッカーが好き!!と伝わってくる。澤選手が初めてボールをかけたのは六才の時。そのつけたボールがゴールに入ったのが、すごくうれしかったから、サッカーを始めるときっかけとなった。小学二年の時、「府口クサツカークラブ」というチームに体験に行くと女の子は一人だった。そして女の子が入団となるとすごく異例なこと、入団するまでに時間がかかった。私が入っているチームには女の子が二人いた。すんなり入団させてもらった。チーム内で女の子が誰もいなくて私一人だったら入団したいと言えなかっただろうな。でも澤選手は女の子一人でも

サッカーを続けた。すごいなあー。澤選手は、「女のくせにサッカーするなんて！」と試合中、相手のチームの男子からバカにされた。気持ちが悪くなったけど、試合中だから無視した。そしたら男の子はスパイクを付けてきた。「やられたらやり返せ！」と澤選手は、スパイクをけり返そうと、ボールのない場所で追いかけてこが始めた。チームは中絶となり、両チームのコーチと、澤選手と相手の男子で、どうしてこんなことになったのか話し合い。女子がサッカーをやっていることをバカにされたと、すごく悔しがった澤選手。私もよく言われることは、「えっ！サッカーやってるん？」とびつくりされたり、「なんで女子やのにサッカーやってるん？」と聞かれることがある。私は、それを言われたり、聞かれたりするのがきらい。心の中で「どうして女子がサッカーしてたら、そんなにびつくりするの？何があかんの？」と思う。澤選手のように、「女のくせに」とか、「女だから」と別あつかいされるのがイヤだから、もっと上手くなってやろうと思う。澤選手が六年生のころで、今から十年前くらいの時、女子には全国大会の出場資格がなくて、ずっと一緒に戦ってきたチームの一員なのに、参加できなかつた。悔しかつただろうな。けど今、男子に混じってプレーしている私のような女の子はいっぱいいる。

サッカーをする女の子の夢を叶えてくれたのは、澤選手のおかげだと思う。私も澤選手のようにもつとサッカーがうまくなりたいたい!! どういうふうにプレーしたら上手くなるか考えて練習している。いつもお父さんが「試合の時は、これをする！」という課題を自分で決めようと言う。そのことを実せんしてみることが大事。なでしこジャパンを目指してがんばる。この夏、「ほまれ」の本に出会えてよかった。

## ブラジルも日本も大すき

小学校六年 アマラル トオ イゴル

ぼくは、二年生の時、ブラジルから日本に来ました。新湊小学校には、四年生の三学期に来ました。

初めて日本に来た時、びっくりしたことがありました。それは、ブラジルとちがって、とても寒かったことです。初めて入ったお店は、でかかったです。ぼくは、日本語が話せなくて、「エウケロウンスコ（ジューズがほしい）」と話しかけたことがあります。ぼくのお母さんは、はずかしそうに、「ここは、ポルトガル語がわからないよ。」と言いました。デパートに行った時もびっくりしました。ブラジルのデパートには、エスカレーターがあまりなかったんです。ぼくは、エスカレーターを見た時に、びっくりしました。ぼくは、うれしくってこうふんして、何回も乗ったりして遊びました。家に帰って、部屋でくつをはいてはいけないと知らないで、そのままあがったら、お母さんが「くつをぬいで。」と言いました。ぼくは、日本には、ルールがいっぱいあるなと思いました。次に、お母さんに、「ベッドはどこ。」と聞きましました。「ベッドはないよ。」と言いました。ぼくは、びっくりしました。「どこに、ねるん。」と思いました。ぼくは、ふとんにねるのがなれていなかったから、朝起きたらこしが痛かったです。ぼくは、町のごとは何も知らなかったです。ぼくは、それで、毎日町をたんけんしました。

日本の学校で勉強を始めた時、友だちはだれもいませんでした。ぼくが、しゃべろうと思っても、

だれもぼくの国の言葉をしらなくて、通やくの人としゃべるしかなかったんです。ぼくは、とてもさみしかったです。家に帰っても遊ぶ友だちがいませんでした。

でも、どんなにつらくても、それを通りぬけて、ここまでできました。この話を先生にしました。先生は、「先生だったら、学校に行きたくないと思うかも知れへん。イゴルが、がんばってこれたのは、どうして。」と聞きました。ぼくは、「ぼくのお母さんのために。お母さんのかわりにしゃべりたい。」と答えました。

日本語は、通やくの先生に教えてもらったり、教室で勉強をしたりしました。今は、アミーゴス学級でも勉強をしています。ほかに、ゲームで日本語をおぼえました。クラスの友だちと遊びながらおぼえたこともあります。

日本に来た時は、何も知らなかったけれどだんだん慣れてきました。校くのこといっぱい知っています。今は、友だちやいろんな人しゃべれて、とても楽しいです。学校も楽しいです。日本は、楽しいです。

ブラジルも日本も大好きです。

## 余命1ヶ月の花嫁

小学校六年 中尾 奈々香

私はこの本を読んで、命ということについて考えました。今まで、自分にとって「死ぬ」ということはまだまだありえないことだと思っていました。たが、病気や事故で、もしかすると、若い内に死んでしまうかも知れないんだ、と思いました。千恵さんも二十三才の時に乳ガンと言われました。二十三才と言えば、まだこれから結こんで、赤ちゃんを産んで、楽しいことがいっぱいあるはずなのに、乳ガンと言われた時はどんな気持ちだったんだらう。私だったら、ずっと泣いたり、周りの人に当たっていたかも知れません。でも千恵さんはお父さんや、かれ氏や、友達の前でいつも笑顔でいました。それはきつと、千恵さんはとてもやさしくて、とても強いからだと思います。千恵さんが小さい時に、お母さんもガンになって亡くなったので、お父さんに育てられました。友達のお母さんを見て、きつとうらやましかったり、さびしかったりしたことがあると思います。それを乗り越えて生きて来たので、千恵さんは思いやりのある強い人間に育ったと思います。

そうやって苦労して生きて来た千恵さんなのに、どうして、ガンにならなければいけないのか、と私はくやしくてくやしくてたまりませんでした。とてもきれいでやさしい千恵さんには元気で長生きして、お父さんに幸せになった所を見せてほしかったです。

千恵さんは、  
「明日がくることはきせきです。それを知っているだけで、日常は幸せなことだらけであふれています。」

と言っています。私はそんなことを思ったことは一度もありませんでした。明日が来るのはあたり前だし、一日一日をそんなに大切に生きてきたことも一度もありません。でも千恵さんの本を読むと、自分に明日が来るのがどんなに幸せなことなのか、わがわかりました。だから、今出来ることは、今やらないといけないと思います。時間を大切に使い、毎日生きていることを幸せに思つて過ごしたいと思います。そうすれば、とっても苦しいポイントボールの練習もしんどい漢字の宿題も、友達とけんかすることも、全部生きているからなんだと思えば、乗り越えられると思います。朝早く起きて、学校に行くのがいやだなあと思う時は、健康でなければ学校に行けない、元気だから学校に行けるんだ、ということをも考えるようにし

たいです。

千恵さんのもう一つのすごい所は、お父さんや、かれ氏や、友達にとでもあいされていた所です。お父さんはあたり前だけど、千恵さんと付き合っていた、太ろうさんはガンだと知っても、はなれて行きませんでした。友達もはなれて行きませんでした。

そして、入院している時、友達が計画して結婚式をあげました。お父さんもうれしかったと思います。千恵さんがいい人だったから、周りにもいい人が集まっていたんだと思う。私も周りの人を大切にして、何かあった時に支え合えるようになりたいと思います。

千恵さんは、二十四才で死んでしまったけど、本や映画でたくさんの人に「生きていること」の大切さを教えてくれたと思います。健康なのに、自殺を考えている人や、他人の命をうばおうとしている人は、この本を読んで考え直してほしいです。生きたくても、生きることが出来ない人たちはたくさんいる、ということを知ってほしいです。そして、命の大切さをもう一度考えなければならぬと思います。

## 障害のある妹

小学校六年 矢倉 華帆

わたしの妹は、障害があります。

原因は、染色体異常からくる発達遅滞で重度知的障害です。

病気の名前は、てんかん発作、もやもや病、思春期早発症、先天性心疾患（心室中隔欠損症、心房中隔欠損症、動脈管開存症、肺高血症）です。

今、妹は小学四年生です。

町を歩くときは、いつも車イスです。

買物をするときは、周りから冷たい目で見られることがよくあります。

駐車場では、車イスマークのある駐車場でも、

健康な人が止めていることがあります。

わたしは、「どうしてみんな、障害者のことを考えないんだろう」と、よく思います。

だから、障害者の住みやすい、社会になればいいと思います。

そうするには、一人一人が気付けばいいと思います。

でも、すぐにみんなが気付いてくれるわけでもないの、少しずつみんなに伝えていきたいです。

最初は、この文をいろんな人に、見て、知ってもらいたいです。  
みんなにも、少しずつ気付いて、行動にうつしてもらいたいです。

## 個性

小学校六年

まわりの人は、ずっと集団でいたいと考えている人が多いと思います。  
でも、私は一人でいたいと考えています。  
理由は、私は人と少しずれていて、話題を合わせるのが苦手だからです。  
私は女の子だけど、一年生するとき、女の子と話をするのが苦手でした。友達も男の子の方が多かったです。なぜなら、私はみんなが知っていたプリキュアとかより、ポケモンやゆうぎ王が好きで、女の子たちとアニメの話をして仲間はずれ

だったのです。だから、ゲームでもたまごっちとかより、ポケモンやファイナルファンタジーやドラゴンクエストをしていました。  
でも、そのうち男の子とも話が合わなくなってきた、みんなと話題を合わせるのがしんどくなつて、一人でいる方が楽だなと思いました。

そして、五年生で転校することになって、二人の子に手紙をもらいました。その二人とは、よくしゃべっていました。友達なのかどうなのかわからなかつたけど、とてもうれしかったです。

だから、今の学校では、みんなと仲良くするためにがんばっています。でもどうしてもうまくできないところがあります。なるべく人と合わせようとしても合わせられません。

そんなときに読んだ小説の個性あるキャラクターが言っていたセリフにとっても感動しました。

「無理に人と合わせていたら、同じようなやつばかりになる。そんな世界は狂っている。」というセリフでした。

無理に人と合わせて、自分の個性をなくさなくていいんだなと思いました。その言葉の意味にとっても共感しています。

同じような人間が多い世界はつまらないし、毎日と同じことのくりかえしの焼き増しの日々になつてしまふと思います。

だから私は、自分の個性をほこりに思います。自分はまわりとずれて、ういているけど、まわりと違う方がめずらしいし楽しいからです。

自分はそのままでいいし、無理にまわりに合わせてもつまらないからです。一人でいるのも気楽だから好きです。

でも、やっぱりまわりと合わせるのも大切だから、できるだけ合わせています。それでも、自分の中で大切な信念はまげません。

## 車イスにのって思ったこと

中学校一年 菊井 奈々子

私は、障がい者理解学習に取り組んで、学んだことがたくさんありました。その中で、特に印象に残ったのは、「車イス体験」でした。

私は、車イス体験で、車イスにのって、色々なものが置いてある体育館を一周しました。とても、

不自由でした。いつもなら、グネグネ道だって、簡単に歩いていたのに、車イスにのつたら、急に難しくなりました。思うように曲がれなくて、すぐに物にぶつかってしまいました。直角に曲がる時も、うしろがぶつかるのではないかと心配でした。そして、一番苦労したのが、ちよつとした段差でした。歩いている時は、意識したことがなかったのですが、車イスだと、段差をこえられませんでした。でも、こういう段差は町にも、たくさんあります。これは、車イスにのっている人は、とても大変だろうな、と思いました。それに、介助の人に手伝ってもらわないと、こえられないマツトの間のみぞも、ありました。これも、町に、たくさんあります。誤って落ちてしまつたら、ケガをするかもしれません。介助の方も大変でした。まず、前輪をうかして、みぞをこえるのですが、なかなかこえられず、みぞにはまつてしまいです。みぞをこえおわつたあと、とてもつかれていました。

このような、たくさんの方の障害物をこえて、一周してもどつてきた時は、つかれていました。こんなにも、車イスで動くのが大変だとは思っていませんでした。でも、この障害物というのは、私たちが作っているのではないかと、思いました。私たちが少し手伝つたり、物をどけたりすれば、す

ごく楽になるのではないか、と思いましたが。こんな考えは、実際に車イスにのつてみないとわかりませんでした。だから、とてもいい経験になりました。でもこの経験を「いい経験」だけで終わらせては、いけないと思いました。この経験で学んだこと、考えたことを実際に行動に移していかなければ、いけません。例えば、自転車を止める時。ざつに、歩道に止めていたら、歩いている人は、よけて通れるかもしれませんが、車イスでは、よけて通ることができないかもしれません。無理に通ると、自転車が倒れてきたりして、けがするかもしれません。とても危険です。自転車を止める時に気をつけることぐらい、私たちにできます。こうして、まず自分自身が作っている障がいもなくしていきたいです。そうしていけば、いずれ世の中から「障がい」がなくなると思います。そうすれば、世の中から「障がい者」という人は、いなくなると思います。なぜなら、「障がい」がなくなれば、障がい者も不自由しません。ということ、は、「障がい者」ではないということ、です。こうなるように、ちよつとしたことから、少しずつ、少しずつ、努力していき、世の中から、「障がい」をなくしていきたいです。

## 今の私にできること

中学校二年 岡本 和音

夏休みに東京から、いとこの絵莉子姉ちゃん遊びに来た。彼女は、大学生で、この夏「フェアトレード」という商品を扱うお店でアルバイトをしているという。私は、「フェアトレード」という初めて聞く言葉にとても興味を持ち、そのことについて、詳しく話を聞き、調べてみることにした。

「フェアトレード」とは「公正な貿易」という意味で、発展途上国の製品を、その労働に見合う価格で買い取るう、という運動である。例えば、コーヒー豆の原産地はアフリカや西インド諸島など、どちらかといえは発展途上国で生産されている。そして主な消費者は欧米諸国、日本などの先進国である。コーヒー店の入口に、たくさんの豆が飾つてあるのを見かけるが、これらの生産国の労働者は安い賃金で働き、教育もまともに受けられない様な貧困生活から抜け出せないのが現状だと言われているそうだ。これに対し、フェアトレードでは、コーヒー豆や民芸品、衣類などを、作り手の労働に見合った価格で買い取るうと考え、彼らの手元に適正な報酬が入るような貿易を行うので

ある。これは長く続けば、少しずつでも貧困の改善にも役立つすばらしい取り組みであると思う。日本でもフェアトレードの商品を扱う店も増えていて、「その商品を買おう。」という運動が高まってきたているようだ。「絵莉子姉ちゃん、そんなすばらしい事に貢献しているなんてすごいな。」と、私は尊敬してしまった。

現在、発展途上国に暮らす人々が、貧困のために多くの問題をかかえていることは、私もニュースや新聞を見てよく知っている。おなかいっぱいごはんを食べて学校に行く、そんなごく当たり前の生活をして生きていく権利は誰にだってあるはずだ。でも実際には、生きる希望も持てずに、その日一日を生きていくのが精一杯の人たちもたくさんいるのだろう。そんな人たちのために、今の私に何ができるのだろうか。むだ使いをしないで募金活動に協力する、物を大切にリサイクルに使えるものを提供する、などそのくらいしか思いつかない。これからも、この気持ちを忘れずに、色々な問題に興味を持ち続け私が成長していく上で、その時の自分にできることをすればいいのではないかと思っっている。いつか時期がくれば、絵莉子姉ちゃんのように、思い切った活動にも参加してみたい。また、身近な中学校生活でも、差別やいじめのない平和な暮らしを心がけることも大

切である。日本中、世界中の人たちが夢や目標を持つて幸せに生きていけることが、今の私の一番の願いである。そのために私は、人に対する思いやりと優しさを、十分に身につけるよう努力し、成長していきたいと思う。

## 障害者と共に助け合う社会

中学校三年 米田 安祐美

最近のテレビでは、障害のある人もドラマの中に描かれています。私も障害者の人が登場するドラマを何度か見たことがあります。なかでも、マンガから、ドラマ化された、「光とともに」が心に残っています。この作品は、自閉症の男の子とその母親の思いが描かれています。また、障害についてなにか考えさせられるような、問題提起型の作品でした。

このドラマからもあらためて感じたのですが、社会全体の中で、障害者に対する理解や、共生は、年々進んでいるようです。街を見ると、スーパーや駅にも障害者のためのエレベーターが設置されているし、道に点字ブロックがあります。テレビでも字幕がふえていたり、手話で通訳していることもあります。また、ユニバーサル商品という、シャンプーとリンスを区別する印がついている商品など、障害のない人にとっても、やさしい商品がふえてきています。

このように、障害者も社会に参加し、共生していくという考えができたのは、まだほんの数十年前ほど前からだそうです。以前は、障害があると差別され、施設の中だけの暮らしでした。しかし、少しずつ権利が認められ、今まで障害があるからといって、学校にすら行けなかった子どもたちが、支援学級や特別支援学校などに行けるようになりました。今では、高校や大学の道も開かれ、就職もできるようになっていきます。

けれど、障害者への差別が完全になくなっているとは思いません。「普通じゃない」という風に見られたり、障害を正しく理解してもらえなかったり、「かわいそうな人」として見られたりして、辛い思いをしている人もいます。誰にでも苦手なことがあるのと同じように、障害もその人の個性

の一つなのです。周囲の人が差別意識や偏見を持つて接してしまうことによって、「障害」というハードルは、ますます高くなるのです。

私は今まで、心のどこかで障害者に対して偏見を持つてしまっていました。でも、ある障害者の方から、

「障害があつたら不自由だけれど、不幸じゃない。

自分なりにこの人生を楽しんでいる。」

ということを教わりました。おかげで、障害のあるなしに関わらず、みんな同じ人間であるということには変わりない、ということがあらためてよく分かりました。

これからの社会を、みんなが一人の人間として、自分自身が選んだ道をまっすぐ歩いていけるようにできればいいなと思います。そのためにも、もつと障害者と接し、協力しながら楽しく共生できるように、自分も心がけていきたいです。

## 私と勉強 中国から日本に

中学校夜間学級三年 青木 美沙子

私の幼い頃の記憶は、中国黒龍江省ハルピンから始まります。両親は、生後数か月の私を連れて、中国へ渡りました。今から六十四年前の事です。そして、一歳の誕生日を過ぎた頃、日本は戦争に負け、私の人生は、大きく変わってしまいました。家族の命が危険な状況の中で、両親は、赤ん坊の私を、中国人夫婦に預けて、帰国する道を選んだのでした。

この事実を、私が知ったのは、小学校に上がった後でした。それまでも、周囲の大人の会話や、天井裏の日本のお金から、不審に思った時もありましたが、養母の「あなたは、私の子どもよ、中国人よ。」と言う言葉に、不安を打ち消していたように思います。書類に、はっきりと書かれた「日本人」の文字を見た時のショックを、今も憶えています。

自分では、どうすることもできない運命のもどかしさを、私は、大好きな勉強に、没頭することで、まぎらわせたのでしょうか。一年生が終わった時に、私は三年生のクラスに上がりました。学校が大好きで、勉強が大好きだった私は、「この

まま頑張れば、大学にも行ける。日本にだって、行ける。本当のお父さん、お母さんにも会えるかも知れない。」そんな、明るい夢を描いていたやさき、養母は、突然「もう学校に行くのは、やめなさい。女の子に勉強は、いらぬ。」と言いました。家にお金もなく、弟や妹の面倒を見なければならなかったのです。学校の先生も、あなたは、勉強が、よく出来るのに残念だ。」と云ってくださいましたが、これも、私には、どうすることもできませんでした。八十四歳で、今も中国で暮らしている養母は、いつも、この時の事を「あなたに悪い事をした。ごめんなさい。」と言います。でも、私は、養母の事は、少しも恨んではいません。当時の中国では、学校に行けない子どもは、たくさんいたのですから。

学校に行けなくなつてから、紡績工場や電気工場で働き、十八歳の時、養母に、勧められるままに、結婚しました。意に染まない結婚でしたが、夫は、優しい人で、私に、毎日文字の読み書きを教えてくれました。私も、本来の勉強好きと、夫の気持ちに応えようと、膨大な中国の漢字も、少しずつ憶えていきました。子どもも授かり、仕事上でも文字に不自由を感じなくなり、本当に夫には、感謝の気持ちでいっぱいです。

一九七二年、日中の国交回復によって、やっと、日本人孤児の肉親探しが始まりました。人の子の親になつていた私も、日本にいる、本当の父、母に会いたいと、強く願いました。日本政府に手紙を書き、テレビにも出て、呼びかけましたが、なかなか手がかりは、つかめませんでした。

私たち、残留孤児を生み出したのは、戦争です。戦争をした政府は、運命に流され続けた、帰国者たちの生活を、守る義務があると思います。やつと、故郷日本に帰つて来た、私たちを待つていたのは、又もや、「言葉の壁」でした。日本人なのに、日本語が分からない苦しさ、悔しさを考えてみて下さい。

幸い、私は、今も元気に、YMCAと殿馬場中学校夜間学級で勉強しています。年をとつてからの日本語学習は、とても大変ですが、私は、幼い頃の時間を取り戻しているようで、気持ちは、晴れやかです。今日も、夫と二人、幸福を感じながら、夜間学級へ通います。

## 「たったひとつのたからもの」を読んで

高校一年 小新井 芳実

私はこの本にとても感謝している。なぜなら、私の夢が決まる第一歩となつてくれたからだ。

この本の簡単なあらすじは、ダウン症として生まれた男の子の秋雪が小さな体で懸命に病氣とたたかい、六才でこの世を去つてしまつたというものである。

私がこの本を読んでいて、心を動かされた言葉が三つあつた。

まず一つ目は、母親が秋雪に対して思った「秋雪は命がけで、また私のところへ戻つてきてくれた。」という言葉である。これはただ秋雪がかぜをひいてそれが治つた時に使われた言葉だ。普通に健康な子どもなら、このような大げさな表現はしないだろう。しかし、秋雪の場合、この表現が大げさではないくらい、かぜをひくというのが命に関わる大変なことなのだ。それほど辛い事を必死で乗り越えた秋雪に、私はとても感動した。

そして、二つ目は、「生きること頑張ろう。」という言葉だ。誰の言葉か、はっきり分からないが、きつと秋雪は心の中であつてもこう思い、自身を励ましていたのではないかと私は考える。

生きることを頑張る。思い返しても私は生きることを頑張ったことがない。無意識に生きるということをしてきたから。しかし、時々はどう考えて生きるのも大切だ。自分や家族、友達のために頑張って生きようと思う時間が必要なことを、この本は教えてくれた。

そして、最後に「静かな寝息の秋雪へ。本当にありがとう。」という言葉だ。これは多分秋雪を知るすべての人が、亡くなつた秋雪に向けて思つた言葉だろう。生きている間には、何度もありがとうと言われる機会があるが、自分が死んでしまつた後に、誰かが言ってくれるかと想像すると、今の私は自信がない。でも秋雪は、その自信のなさを吹き飛ばすかのように、沢山ありがとうと思われていて、本当にすばらしい生き方をしたんだと思つた。

この三つの言葉のように、この本は沢山のことを読者に学ばせてくれる。とても小さなことから大きなことまで、自分が忘れていることを、また思い出させてくれるのだ。

私がおもひこの本と出合つていなければ、私の夢は他の何かだったのかもしれない。障がい者と関わる仕事に就くこと、それが私の夢。必死に頑張つて病気とたたかっている人は、秋雪以外にも沢山いる。その人たちが一日でも長く生きられるよ

うに、私は手助けをしたい。一人一人が死ぬと、何十人何百人という人が悲しむのだ。悲しむ人を減らし、喜ぶ人を増やしたい。私が望むのはただそれだけだ。単純なことのように思えるが、意外と難しい。この本から学んだことを生かして、私は自分の夢を叶えたい。

## 「心のバリアフリー」

成人 国重 貴之

彼と一緒に歩くと大阪はひどく凸凹でした。私が大学時代のときに大阪駅で彼がピラ配りをしていたところを通りかかったのが、彼との出会いでした。彼は当時、夜間学校に車椅子で通学している中学生でした。年は当時五八歳。彼は大阪駅で自分の介護をしてくれる人を募集していました。私は彼の介護をするようになり、気づかされたことが多くありました。

車椅子を押しながら町を歩くと、道がすごく凸凹であることに気づきます。一人で歩いているときには気にも留めないような段差が、車椅子にとっては大きな障壁になることもありました。そのまま押して進むとすると、前方の車輪が引っかかり、つんのめってしまうので非常に危なく感じました。そういった段差は非常に多く、前方の車輪を毎回持ち上げて越えなければなりませんでした。

電車に乗るときも一苦勞です。駅にエレベーターやスロープが設置されている駅は意外と少なく、JR大阪駅の環状線ホームにエレベーターが設置されたのは平成十五年です。それまでは四人がかりで車椅子を持ち上げて、駅の階段を上がっていくしかできませんでした。

彼がもし一人で大阪の街を自由に動くことができたなら、障がい者という言葉は私と彼の間には存在しなかったでしょう。私たちが気づかない歩道のちよつとした段差でも彼にとつては大きな壁となつてしまいます。彼に出会つたことで私は相手の目線で考えることの大切さを教わりました。私が彼の手助けをすることで彼は大阪の街を困ることなく移動することができず。大阪の街はまだまだバリアフリーとは言いがたいですが、私たちの心がけや助け合いによつてバリアフリーな社会

に近づけることができず。全ての駅にスロープやエレベーターを設置することは私一人の力ではどうにもできませんが、心のバリアフリーを進めていくことは簡単にできることだと私は気がつきました。

例えば、目の見えない人が横断歩道に立っていれば、「手引きしましょうか。」と声をかけ、一緒に横断歩道を渡つてあげるよう心がけるようになりました。ほんの少しの手助けしかできませんが、それが助けられた本人にとつてはすごく安心できるし、大きな力になると彼は言ってくれました。

私は彼の介護を通じて多くのことを学びました。障がい者が不便に感じていることが自分の視野だけでは気づかなかつたこと、相手の立場に立って考えることが大切であること、そして何より、助け合うことが社会のバリアフリーにつながるということです。心のバリアフリーが大阪を彼の住みよい社会へ変えていく一歩だということを忘れずに生きていこうと思ひます。

## 少女の言葉

成人 児島 和男

私は大阪府出身ということもあり、中学校の頃から、同和問題に触れる機会がありました。同和地区とは、その歴史とは、現在にも残る差別とは。色々なことを「学習」してきました。道徳後の休憩時間には、よくその内容について話をしたものです。同和問題の授業後は、不思議と別の話になりました。当時の私には、この問題をどう扱えばいいのかからなかったのだと思います。知識だけが増えていき、問題に向かい合う心の成長は伴いませんでした。私にとっては、見ぬふりをすることが唯一の手段となつていきました。

社会人になつたある日、ふとしたことから、キャンプに参加することになりました。そのキャンプは、外国籍やいわゆる「部落」に住んでいる子どもたちが交流するものでした。

正直言つて、参加したくありませんでした。私はそういうものには関わりたくないのです。出来るだけ遅く参加して、早く帰ろうと心に決めての参加でした。ただし、夜にはみんなで語りあう時間があるのですが、それには必ず参加しなければ

なりません。前日の私の気持ちが軽くなることはありませんでした。

当日、天気はよく、絶好の海水浴日和でした。子どもたちはカヤックに乗ったり、海水浴をしたり、楽しそうにしていました。私はテトラポットの上に座りながら子どもたちを眺めていました。「おじちゃん泳げるの？」おじちゃんという言葉にムツとしながら目を下に向けると、可憐な少女が一人立っていました。「泳げるよ」私が言うなり強引に海まで引っぱつていき、その少女の友達たちと海に入りました。普通の子どもたちだと安心すると同時に、一人でさびしそうにしていたであろう私を、遊びに誘つた子どもたちの優しさにびっくりしていました。遊ぶうちに日は暮れていき、ミーティングの時間になりました。気持ちは少しだけ軽くなっていました。

一人ひとり、自分の「経歴」を明かしながら、その「経歴」とどう向き合っているのかを話しています。子どもとは思えないくらいしっかりと話していました。私は何故か顔を伏せていました。ふと「部落を忘れないで下さい」と聞こえました。今までの私とは正反対の考えに思わず顔を上げると、あの少女でした。昼間の可憐さはありませんでした。

人は皆、違いを持っていて、その違いがあつてこそ自分が自分であり得ます。色々な歴史のある地区に生まれたことは違いかもしれない。その違いを認め、尊重して欲しい。彼女の言葉がそれまでの私の姿勢を変えました。

私は弱い人間で、人の弱点を知ると安心し、自分が上に立つた気になつてしまいます。自分の弱さを認め、色々な違いを受け入れていく事は一朝一夕では無理かもしれませんが。たとえ少しずつでも、あの少女の言葉の示す方向に向かつていけるようにと頑張つていきます。

## きつとできるよ

成人

私はいじめで精神を病み入院して、生まれつき不自由だった身体を余計に悪くしました。でも、親が愛情を与え続けてくれたので、私はひどくな

つた身体を受け入れ、今、病院を退院し、二軒目の中古の家で生活しています。二十三年前、死ぬと思つた足を負傷しました。

その時、母が「私の皮膚をやつて下さい」とドクターにわめくのを聞いて、愛を感じました。「まあちゃんが生きてて良かった」と言つてくれました。世界中敵だらけになつても、母は私をいつくしんでくれていて、父も。共働き家庭で、学校、いえ幼稚園からいじめられていた私は、その時両親の愛を確認出来たのです。

それから不自由になつていく身体と格闘してきました。こんな私でも言えることは、人より少し見かけが不便であるだけで、ストレス発散のまゝとにするのは、いじめめる方が百%悪いということです。スポーツするなり、学業に打ち込むことで自信がある人はいじめられません。ストレスで判断ができないから、いじめられる方の心の痛みがわからないのです。いじめてストレスを吐き出すのを私の時代は、四十名対一名みたいな行動に出られました。

脳性マヒの一種だったから、あだ名がロンパリ、内また、北京原人、いんけん、バイキン、死ねと教科書に書かれました。死にたい子、死んじや駄目だよ、いつかきつと春が来るから。絶対言えませぬ。

多くの精子の中で一番優秀なのが卵子と出会ったのがあなたです。自信を持っていいんです。不自由な身体もこれは私の個性です。

絶対死んじや駄目、人間として生まれ来てきたからには自分で強くなるう、とりあえず得意なこと作ってそのリーダーや補助になって何かを習得したりして誇りをもとう、健全者も障害者も。

ふだんの生活の中で、盲人の点字ブロックの上にとかを笑わないで下さい。自分がそうだったらどうします、聞いてみたい。私もこうして社会参加しています。日本文学館さんに原稿用紙二枚分の文章を、応募して、入選して社会参加して本が出ます。いじめられる子も特技をもとう。

行政もうごかないと、いじめの自殺者は減りません。自殺未遂者三十万人の今の世の中。

十年何か続けることを障害者もおそれないで下さい。何かモノになるよ。盲人の人も感触があり、障害者と健全者が遊べるおもちゃ、音の出るおもちゃを開発したりしてる。

社会参加は必ずできます！

## 自分の居場所を作ろう

成人 西野 信一

私は今、七十四歳の高齢者まっただ中で生かされていきます。

朝寝床で目を覚まして、布団の上で手足を力いっぱい伸ばし背のびをします。その時自然に出て来る言葉は「ありがとうございます。その時自然に出て言うともなしに、時には声にならない心の中の、感謝の気持ちそうさせるのだと思います。

人間は、一人では生きて行けない動物ですから、七十四年間も生きて来たというより生かされて来た私にとつて、それこそ数え切れない多くの人たち日本の力支えられて来たのだと思います。そして日本の国だけに止まらず、世界の、地球上のすべての国やものに少なからず恩恵を被って来たことは、まぎれもない事実だと思えます。

話はどんどん大きくなって行きますが、無形有形を問わず、一人の人間として生かされて来たことは今更疑う余地はありません。

されば、私自身これでよいのでしょうか？と、いつもながら自問自答するのです。が、何かの形で今迄に受けて来た恩恵に対し、お返しせねばな

らない。の、この気持ちが自分自身をふるいたたせませす。

世間一般に言う「ギブアンドテイク」の精神がいつの世にも通ずる人間としての道理だと思いません。

このことから私は、ボランテアをしようと思ひしました。ボランテアと言つてもどこそこの団体に属すると言うのではなく、また公的なものでなく自分の生活の中での一部分として、それに値するものであればと、先ず手始めに道路端のゴミ拾いをしました。そして、学童の登下校時の見守りをするとかで、それも自分一人だけではなしに、一人でも多く仲間を増やそうと、心をもやしているところですよ。このようことから朝起きて、今日はどのようにして一日を過ごそうかな、なんて、時間を持て余すことのないように、毎日日課のように自分自身を責め立てています。

年をとつて来ると、何をしても億劫になつてしまいがちなんです。仲間が居ることによつて大きな歯車の一部であつても、全体の流れの中に入り込むと言ふことが、何よりも大切だと自覚しています。

人には四つの大切なものがあると聞かされています。その一つめは「愛されること」。二つめは「褒められること」。三つめは「役立つこと」。四

つめは「必要とされること」。ですが私自身この年齢になつてボランテアを始めこの四つのこと巡り会えて、本当によかつたと思つています。そして人間いくつになつても、自分の居場所のあることの喜びを今実感しています。